



「放置竹林」を知っていますか？

文字通り「放置された竹林」のことです。「放任竹林」と呼ばれることもあります。

「放置された」ということは、かつては人が管理していたけれど、いまはされていないということです。いま、全国各地でこの「放置竹林」が大きな課題となっています。



日本人のくらしと竹

かつて、竹は日本の生活のいたるところで活用されてきた身近な材料でした。

古くは『竹取物語』にも登場する竹ですが、食器や民具、工芸品や建材、楽器や神事にいたるまで、実に日本の風土に根ざし人々のくらしを支える身近で重要な素材だったのです。

また、戦後タケノコは食材としての活用が各地ですすみ、積極的に植林を進めてきた地域もありました。

しかし、今日ではプラスチックなどの新しく便利な素材の普及や生活様式の欧米化などを背景に、竹を素材として利用する機会が減少するとともに、食用としてきたタケノコも安価な輸入タケノコの流通で国産のタケノコの流通も減少していきました。

「放置竹林」の登場

徐々に日本人のくらしから竹が姿を消していくと、竹林資源を管理してきた業者や職人も減少していき、やがて放置される竹林が増加していきます。管理者を失った放置竹林の竹の根はやがて周囲への進出していき、たんに放置されっぱなしの竹林が同じ面積のままあり続けるのではなく、時間の経過とともに拡大していくことになったのです。

急斜面の竹藪は崖崩れの危険性

竹は、毎年3メートルから長い場合では5メートルほどの地下茎を伸ばし、そこからタケノコを生やします。雑木林に隣接して放置竹林があると、竹は、雑木林の中にも地下茎を伸ばしていきます。そして、わずか2~3か月で10数メートルから20数メートルの高さまで育ち、陽光を遮っていくことにより他の雑木を枯死に追いやっていきます。こうして雑木林は竹藪へと姿を変えていくのです。

急斜面に竹藪がひろがると、崖崩れの危険性が高まってしまいます。生育力旺盛な地下茎は、横へ横へとひろがる性質をもっています。つまり地中深くへはあまりひろがらないため、大雨が降ると一気に竹藪がずり落ちることがあるのです。放置竹林の拡大は、たんに景観の悪化にとどまらず生物多様性の低下のほか、ふもとに民家がある地域では災害のリスクが高まることを意味しているのです。

単純な「竹害悪論」ではなく、共生の道を

~“持続可能な開発”の視点に立って~

竹はいまや厄介者扱いされ「竹害」とさえ呼ばれることもあります。

しかし、「竹林」を「放置」してきたのはわたしたち人間です。

SDGsの視点から竹を考えたとき、竹を絶対悪として排除するのではなく共生の道を探ることこそ最良の選択です。そのためには、適切な竹林管理と竹の利活用の促進、そしてそこに新しいアイデアやテクノロジーを融合させることが必要です。次号では、その一例を紹介したいと思います。



(掲示した用紙はFSC®認証紙を使用しています)